

福祉とかがわった半生

「いざというとき」共募の出番、災害準備金積み立てを

県立保健福祉大学
山崎美貴子学長に聞く

ことし四月、横須賀市平成町にある神奈川県立保健福祉大学の学長に就任した山崎美貴子さん(71)は、著名な社会福祉の専門家である。研究者としてだけでなく、教育者・実践者としても知られ、およそ半世紀に及ぶ行動と発言は、学生やボランティア、社会に大きな影響を与えてきた。福祉の世界に飛び込んだ動機、印象に残る出来事など、先生に福祉とかがわってきた半生を語ってもらった。

の観音崎で開かれた手足の不自由な子供たちのためのキャンブに参加したことがあります。こちらは若いし、やる気があるから元氣いっぱい。一方的にプログラムを押し付けようとしていました。

ところが、相手は就学を猶予された子供たち(そんな制度があった時代です)。外出したこともなければ、テレビや母親だけが友だちという生活から初めてキャンブを経験する子供たちもおりました。顔はこわばり、わきの下に汗をびっしょりかくほど緊張しているのに、ちっとも気が付きません。

ごう慢で、独善的で、相手を分かっているのに分かっていないつもりです。善意はあっても誠意はありませんでした。誠意とは、相手の気持ちや望みに寄り添いながら一緒に歩むことです。そのことを、ハンディある



Interview



県立保健福祉大学の建物とグラウンド

先生は大学時代、障がい者のボランティア活動に参加し、大学院では社会福祉論を学びながら、ソーシャルワーカーの仕事に携わっていたと伺っています。そのあたりに、福祉の世界に飛び込んだ原点があるように思うのが…。

山崎 大学二年か三年のころ、横須賀

組みを作り上げていました。一人暮らしのお年寄りへの食事サービス、ゼロ歳児保育、障がい児のための通所施設…。まだどこも実践していない、先駆的な仕事でした。

このように、社会館では高齢者、保育、障がい者などさまざまな問題にかかわることができ、非常に勉強になりました。また実践の中から学び、実践の意味を体系化したい、との思いから研究にも熱をいれました。

立教大学大学院卒業後、イギリス留学などを経て、七七年から母校の明治学院大学教授。実践の中から学び姿勢はますます強まり、学生と一緒に事例研究会に参加したり、地域に飛び出し積極的にボランティアのネットワーク作りに努めるなど、福祉の山崎の名声は年を追うごとに高まる。九六(平成八)年から同大社会学部長、九八年からは同大副学長に。



キャンパスで憩う学生たち

子供たちから学びました。福祉にかかわるようになった原点ともいえる体験です。

横須賀は少女時代を過ごした懐かしい土地。中学・高校は横須賀に校舎があった清泉女学院(現在は鎌倉市城廻)で学び、明治学院大学文学部社会学科に進学。障がい者キャンブのボランティアは、そのころの思い出だ。一九五八(昭和三十三年)同大卒業後、立教大学大学院へ通う傍ら、横須賀基督教会の非常勤職員に。

山崎 社会館では、地域の人たちと一緒に、地域に根ざした新しい福祉の仕

地に集まったものの、お互いに顔の見える関係になかったので、活動はバラバラ。非常に非効率なものでした。顔が見えると、もっと協力し合えるし、ニーズにあった仕事ができるのに、という反省から、東京に百八のボランティア団体が集まって、みんなで、東京災害ボランティアネットワークを立ち上げました。それが三宅島噴火の際に役立つのです。全島避難直後の、都内をはじめ各地に散った島民の電話帳作り、十九回にわたって開催した「島民ふれあい集会」、帰島後の家の整理など、各団体が役割を分担、エネルギーを結集し、島民のニーズに寄り添いながら必要と思われるお手伝いをさせてもらいましたが、各団体が顔の見える関係が大きな財産であり、力となりました。

静かで穏やか、確かな記憶力と理にかなった語り口は魅力的。コーディネート役として市民からの信頼は厚く、常に実践の場に目を向け、生きた実践を体系化してきた。

神奈川県社会福祉審議会会長など、多数の役職を務める。また保健・医療・福祉に関わる人材の養成を急務と考え、阿部志郎前学長と共に神奈川県らしいヒューマンサービスをめざす大学づくりに参画し、〇三年三

先生は、県共同募金会「あり方委員会」のワーキング会議委員長として〇三年三月、「これからの共同募金運動を推進するために」という提言を出されました。

山崎 災害が発生したとき、ボランティア拠点としてのセンター立ち上げが必要です。しかし、その活動資金をどうするか。まさに共同募金会の出番です。県共同募金会も災害準備金を積み立てていると思いますが、いざというときに支援金を、活動の種火を提供するのです。共同募金会ならではの「売り」になるでしょう。

日常的には、地道に地域を耕している活動団体を応援してほしいと思います。小さいけど、しっかり根を張っている野の花に水をまいて、大輪でなくてもいい、きれいに咲かすのです。「赤い羽根」という信頼のブランドは大きい。ぜひ生かしてほしいものです。

聞き手 大谷 義輝

(神奈川県共同募金会常務理事)